国際宗教研究所設立 50 周年記念講演会　報告

宗教者からの社会への提言

国際宗教研究所は 1953 年に設立されたが[i]、2003 年度はその 50 周年にあたるので、記念事業が計画された。その一つが 11 月 9 日（日）午後 2～5 時に国学院大学 120 周年記念館 1105 教室で行われた講演会であった。国際宗教研究所は、研究者と宗教者、さらに一般社会をつないで、意見を交換し、時代の課題を見出すという目的を当初からもっていた。そこで今回もそれに沿った企画をということで、「宗教者からの社会への提言」をテーマとしてお二人に講演を依頼した。一人は飯田女子短期大学教授で、「ビハーラの会」本部世話人代表の田宮仁氏で、もう一人はノートルダム清心学園理事長の渡辺和子氏である。

田宮氏は浄土真宗本願寺派の僧籍も有しており、仏教的理念に基づいたターミナル・ケアを展開するために、1985 年に「ビハーラ」という呼称を提唱したことで知られる。ビハーラ運動は超宗派的なものとして展開してきた。その理念等については、同氏が共著で刊行した『臨終行儀―日本的ターミナル・ケアの原点』（渓水社）に述べられている。

渡辺氏はカトリックのシスターであるが、30 代のときから岡山のノートルダム清心女子大学の学長も勤めた経験を有し、信仰と教育の双方に情熱を注いできた。渡辺和子氏は２・２６事件で殺害された教育総監渡辺錠太郎を父とするが、その父が殺害された現場に居合わせたという壮絶な体験を幼少時にもっている。主著『目に見えないけれど大切なもの―あなたの心に安らぎと強さを』（PHP 研究所、2000 年）『人間としてどう生きるか』（PHP 研究所、2003 年）など多数の著書がある。

脇本平也理事長が今回の記念講演の趣旨について説明したのち、田宮氏が最初の講演を行った。同氏は超宗派的活動の難しさについて触れると同時に、若い世代に「死」のもつ意味を伝えていくにはどうしたらいいかについて、自ら行っている方法をスライドを用いながら具体的に紹介した。興味深い一つの例は金魚を用いた授業である。一人一人に金魚を掬ってこさせる。そしてその金魚に関する物語を作成させる。名前もつけさせる。それぞれの金魚が学生たちにとって親しみある存在になったとき、「どんな方法でもいいから、その金魚を殺しなさい」と命じる。ちょっとしたパニックになる学生もいるという。最後は殺さなくてもいいということになるのだが、そのあとの金魚の扱い方はすごく丁寧になるという。

次に渡辺和子氏が講演された。父の思い出から始まり、20 代でシスターとしてアメリカに渡ったときの体験、学長としての体験、そしてマザー・テレサの通訳を行ったときの体験などを中心に、生きること、命の大切さについて、聴衆に訴えるような話が次々になさ

れた。時間を粗末にするということは、命を粗末にすることにつながるという指摘には多くの人がうなずいていた。

講演会終了後、参加者に対して、今回の講演会の感想等についてアンケート用紙を配り、自由に記入してもらった。その結果を読むと、二人の講演者に共感を覚えたり感銘を受けたという趣旨のものが多かった。感想が数多く寄せられた。そのうちの一部を紹介したい。

「(渡辺氏の)『私自身が変わった以外何も変わらなかった。だからこそすべてが変わった』という言葉に、今日最大の宝物をいただいた思いで帰ります。」

「2 つの方向、立場をもった方から、学問的視点としてよりも、むしろお 2 人方の内面から、深い探求の結果得られた視点で語っていただいて、非常に有意義であった。」

「田宮氏は死という絶対の静寂の中から、渡辺氏は日々の行い、祈りという行為の中から現代社会へ行なった提言は、宗教、宗派の違いを超えて宗教が社会へ貢献できるのだということを示しているように思えた。人間の死を考え、受け入れることの大切さと難しさを改めて痛感した。」

「ビハーラの理念と実践についてのお話は勿論、その担い手を育てる努力を知ることができ、有意義でした。

（渡辺氏の講演は）心が洗われるような講演でした。一時間が短く思えました。キリスト者としての立場からの一流のお説教と理解しましたが、同時にそれが人間社会をよりよくするための突き詰めればどのような立場の人間も目指すべき普遍的な教えであることを改めて感じさせられました。」

「印象に残ったのは、時間の使い方は命の使い方というところでした。宗教という言葉はもともとは生活に密着していたものだ、と気が付きました。」

「田宮先生の言われたとおり、現代人にとって『死』から目をそらすことは死への恐怖、不安からの逃避になってきてしまったと思う。『死』を看取ることから始まる生の意味への探求が今必要となってきた。先生の試みに感謝するのみ。」

最後に、一人の国学院大学の院生が比較的長い感想レポートを提出してくれたので、そこから一部抜粋したい。まず田宮氏の講演については、次のように述べてある。

「仏教看護の授業はとてもユニークでどれも経験してみたいものばかりだったが、様々なアイデアの中に『看る』ということについて学生たちに真剣に考えてもらおうとしている雰囲気が伝わってきた。」

また、渡辺和子氏の講演については次のように述べてある。

「『今の世の中は不平不満ばかりで、周りへの感謝が必要。人間がダイオキシンを発生して

いる。』という言葉を聞いて反省しなければいけないことがいくつも思い浮かんだ。毎日些細なことでイライラして、私はダイオキシンの発生源になっている。『結果がわかるからするのではなく、わからなくてもいいからする』という言葉も胸に突き刺さった。自分が純粋な気持ちで頑張っていることが一体いくつあるだろう。大なり小なりみかえりや利益を求めて行動しているような気がする。（中略）渡辺さんの講演はこれから生きていく上で大切にしたいことを教えてもらうことができた。社会へのというよりも私への提言かと思うぐらい、私にとって胸に突き刺さる内容だった。」

以上の反応で分かるように、心に染み入るようなお二人の話であった。50 周年記念としては、もう一つの企画を予定しているが、それは決まりしだいお知らせしたい。